# 老骨

大洲由美

人はこの世にオギャーと誕生と同時に、死と言う定められた世界に向って、貧富の差なくゆっくりと、又ある時は急いで長旅をする。途中で不可抗力の為に、長旅の適えられなかった不幸な方もあります。

死生命あり。人の生死は天が定める運命によるもので、人の力ではどうすることもできない（故事）。

若い時は、自分が老人になるとか死ぬとかと言う事は、先の事と達観していたが、老年に入ると状況は一変して、否応なしに老人に忍び寄る衰えや、物忘れが多くなると、老人の胸中を察する。時折、死に就いても寸時考えるようになった。

信子（仮名）大正四年生れ、今年九十六歳で、居宅介護支援を受けて、自宅で一人で生活している。

私は信子の家に一ヵ月一回の割合いで、京都から広島の信子の家に行っています。

信子は平成二十年に右大腿骨頚部骨折にて、骨接合術をした。目下、杖を使ってよちよち歩いて居ります。

信子の生活は、家には大きな風呂がありますが、使用する事はありません。何故ならば、ある日、入浴中に湯船から出られず、風呂で大格闘して、やっと生還したそうです。その時の恐怖があるので以来注意しているとか。

日常は、月・木曜日はデーサービスを受けて風呂に入って、帰宅時に夕食の弁当を貰う。

火・水・金曜日は弁当を夕方に配達して貰って、安否を気遣って下さる。

水・土曜日はヘルパーさんに掃除と買物をお願いする。

一ヵ月の内の一週間は介護支援所に泊まる。家に居る日は自分で料理を作る。と言っても成る可くガスを使用しない料理を作る。夕食の弁当を昼と夜の二食にし、朝はパンや餅にコーヒーと果物を食べている。

火災には特に注意して、ガスの元栓の締め忘れには神経質で、何度も確認し、火事で近所に迷惑を掛けないよう心掛けると言った。

信子は認知症になったらこの家に住めない。私は最後までこの家に居て死にたい。これは信子の強い願望だった。

信子の家は木造平家建て、相当に古く雨戸はがたついていた。庭は広く梅や柿の木、椿等々いろんな立ち木がある。唯一、この家の贅沢は庭木がいつも剪定されている事だ。これらの樹木は信子の命の源になっていると、信子は剛毅した。なるほど、窓から見える樹木は春夏秋冬、花や実を結び四季を知らせて呉れる。正しく居乍らにして森林浴が出来ると、私も緑のお相伴にあずかっている。

こんな恵まれた環境にあっても、人の心は穏やかとは言えぬらしい。

二十二年一月、今回は何か違った。私が玄関を入ったその瞬間、思いの外にゆったりとした気分で、殺風景な上がり框の前に立った。以前とは何一つ変わっていない玄関なのに、空気さえ柔らかく感じられた。私の血圧が最近安定している所為かも知れないと思った。

部屋の硝子障子の向こうの信子の今日のご機嫌はどうだろうか、いつもの事ながら信子の精神状態が気になる。一人で寂しさからか、攻撃的な口調が、次第に緩んでゆくのだが、時には堪えがたい。帰り際になると悲愁となる。「御免下さい」と、声を掛けて勝手に上がり込む。信子は常に奇麗主義を唱えて、私は信子から注意されるので、キャリーケースは玄関の横に置いて、お土産だけを手で抱えて部屋に入った。

信子は白内障で目が悪く、耳は難聴なので耳に口を付けて話す必要があった。

私の姿を見た信子は、緩慢な動作でゆっくりと起き上がり、私のお茶を用意すべく無言で台所に行った。

私は急いで仏前の前に座って線香を供え、信子の亡き夫に合掌して、今日訪ねて来た事を報告した。

そして、小走りに歩き台所に行って、湯を沸かしてコーヒーを二人で飲む。信子は水分不足を医者から指摘されているので、取り敢えず互に水分摂取をする。信子は口が渇く事もないらしく、然程水分を欲しがらない。

私と信子の関係は、信子九十六歳、私は七十三歳で戸籍上は歴とした姉であり私は妹。それ以上は詮索しない事にしています。

信子は今回は特に私に聞きたい事があると言った。

「黒いコートが洋服ダンスの中に入っているが誰のだろう。私が留守中に他人が家に入って来たと思う。あんた来て入れた？」

「いいえ」

私は以前に、信子から要らぬコートだと言って譲られた。そのコートを着て広島駅

に下り立った時、信子は駅まで出迎えて呉れた。
「やはりそのコートを返して欲しい」
私は信子にそう言われて、コートを渋々返却した。それなのに記憶がないとは変だ。私は信子からコートを取り、裏返して見た。すると、京都のクリーニング店のマークが付いていた。私はそれを見て信子に言った。
「このマークは家の近くの洗濯屋のマークよ。私が貴女に貰った時に持って行ったのよ。これは貴女のコートですよ」
信子はやっと納得したが、記憶の回路脱線にやっと気付いて、恍けた顔をした。
「白髪に黒のカシミヤのコートは上品で、品位がありますよ」
私がそう言うと、やっと信子はコートを着た。そのコートを着てホテルに行く事になった。
信子の家は広くて布団もあるけど、信子は客を家に泊める事を嫌がった。それは、布団にシーツにパジャマに食事と、後始末が大変だから出来ないと言った。それと潔癖性でもあった。ホテル利用なら何の心配も気兼ねもなくゆっくり出来ると言うのが、信子の持論だった。幸いにして、ホテルは信子の家から近くにあった。私も大いに助かったのです。
夕食後、信子はホテルの風呂に入ると言って裸になった。
――と、いつも見慣れた膝から下までの皮膚が異様に茶色で、白い瘡蓋も数個あり、じくじくして黄色い水も出ていた。私はそれを見て絶句した。
「どうしたの？」
「薬の副作用らしい」
私はこれでも生きている人間の足だろうか。自分の目を疑いたくなった。信子は二の腕にも足と同じ皮膚病が出来ていると私に見せた。私は返す言葉もなく目を背けてしまった。その瞬間、私は今迄信子と会うと事毎く反発し合っていたが、此れからは心を改める事にした。今迄の憤懣は吹っ飛び、言い知れぬ悲しみが襲って来た。
信子は最近は死にたいと連発するようになった。百歳迄も生きたいと言っていた人が、主治医に対しても、
「先生は病気を治療するばかりではなくて、老人が楽に死ぬ事を考えて下さい」
信子は理不尽な事を主治医に言う。私だって返答に困る。
近頃は信子は死んだら何処に行くのだろうかと、独り言をつぶやいている。

「死んだら浄土に行くんでしょう。阿弥陀様の所」

私がそう言うと、信子は上の空で聞いた。信子は確固たる信念を持って、目に見える世界を期待している。そんな答えはどこにもない。

この信子の姿を見ていると、他人事ではない、やがて自分と思うと訳もなく慌てふためく。今、自分は何を為すべきか、自問自答しながら月日は流れて行く。何れにせよ、信子は私の教科書、考える一石を投じてくれていると思う。

先日、遠縁の方が百歳で黄泉の国に旅立ちなさった。昨日迄はとてもお元気だったとか。私もその方に肖りたいと思った。

生と死はいつも背中合わせで暮している自分なのに、欲と言う字に手足を付けて闊歩している自分の姿を垣間見る。併し、死と言う陰が忍び足でゆっくりと近付いて来ると、欲と言う俗物を剥ぎ取り、身軽になりたいと思う。信子もやっと、そんな胸中を察して来たような気がする。

以前の信子は自分の財産管理を、あの人に託したりこの人に託したりで、重要書類は渡り歩いた。その都度怪しいと失敗して、取り戻す役はいつも私に託された。相手はどの方も若くて、水も滴る美男子揃いだった。最後は現金を全部吐き出して、やっと信子は目覚めた。そして私に信子は言った。

「あんたは変わった。優しくなった」

私は何も変わってはいない。健康になっただけだった。

数十年前は信子が初めて入院した。私は信子の所に月に一、二回通った。私も仕事があった。帰宅したら必ず膀胱炎で血尿が出た。腸にはポリープが沢山出来て、心臓も不整脈で、体はぼろぼろだった。今は仕事はない。

老骨とは、頭の中の構造がどう変化するのだろうか。

人間の知力で宇宙まで飛んで行ける時代なのに、老骨の原因解明は闇の中。人間は生まれ変わり死に変わる輪廻。これが自然の法則と判っていても愚かな事を考えてしまう。

信子の通過の後ろを私が追っている事は間違いない。